

②発表要旨

墓のエージェンシーに照射される死生観：現代沖縄都市部における墓を事例に

越智 郁乃（広島大学大学院 特別研究員）

本発表は、モノのエージェンシー（行為主体、媒体）という概念を用いて、墓における「モノ」の変化に注目し、「墓」と「人」の複雑に絡み合いながら継続する相互作用について検討することで、そこから照射される人々の死生観に迫ることを試みるものである。

近年、人類学において、客体として操作される物体として「モノ」を捉えるのではなく、「モノ」と人のあいだのネットワーク、越境、ハイブリッドといった現象に目を向ける研究が進められている[足立 2000、床呂・河合 2011]。本発表で事例とする沖縄においては、墓は「あの世の家」とされ、その快適さ如何によっては子孫に影響を及ぼす存在であることや、墓自体に一年忌、三年忌、…と人間同様に年忌供養を行うことが知られている[名嘉間 1979、渡邊 1994]。このことから墓に人格的存在として、そのエージェンシーが認められるだろう。しかしながら現代の墓に用いられる「モノ」の変化により、墓が管理されるだけの単なる客体として捉えられるようになっていった。

墓制研究を概観すると、琉球列島における洗骨改葬墓制の枠組みから、各地域の墓制の多様性や墓地風水に関する研究が進められてきた。中国由来の墓地風水が琉球王府の士族層を経て、20世紀初頭にかけて庶民層に広がる中、山の斜面を掘込み、外面に琉球石灰岩を積んだ墓形が沖縄各地に広がる。しかし、1945年以降、火葬の急増に伴い洗骨が減少し、墓は小さくなった。またコンクリート建材の使用により、平地型の墓が増加した。その後の集団墓地の増加、1980年代以降の経済発展による日本本土からの墓石業者の参入により、現在、輸入石材、特に花崗岩が墓石として用いられている。だが、こうした外来の「モノ」を用いた墓は「非伝統的な墓」と現地において捉えられ、これまでの墓制研究の範疇に入っていない[越智 2008、2009a]。そして沖縄において、生者の生活世界に深く「介入」する祖先との関係は、位牌の祭祀に関する研究に特化し、祖先のエージェントたる墓は現在、操作、管理されるだけの単なる客体として捉えられている。そこで、「モノ」の変化によって主体としての墓が人といかに交渉しあい、そこにいかなる新たなエージェンシーが生まれるのかということに注目する必要があると考えた。

本発表では、沖縄本島北部農村 O 村からの移住者が那覇市某所に 1954 年に造墓した集団墓地を事例に、墓での祭祀や改修など、50 年以上にわたる実践と墓に関する語りを資料と、墓と人の相互交渉に関する考察を行う。戦後各地から本島中南部への人口移動が増加する中、O 村も移住者を多数排出した。移住先と出身地との距離から、墓への祭祀が不足することを懸念した人々により集団墓地設立が呼びかけられ、移住先での互助組織である郷友会会員の内 16 名が墓地建設組合を結成した。結果、16 株（集団）の模合により集団墓地を造り、その後集団で墓に対する祭祀を行っている。

ここでは一人の株持ちに対して、出身村で同じ親族集団で、かつ共同で墓を使用していた移住者が賛同・出資し、同じ墓内に入る権利を持った経緯がある。そこから、出身村における親族集団の繋がりや集団の記憶が継承されているといえる。その一方で、移住者の人生の

証しとして墓を造ったと考え、個々人の記憶を継承していこうとする子孫の姿から、墓に記憶を表現し、また墓から記憶を引き出している墓と人の相互交渉が明らかになる。さらに、造墓過程や改修においては、米軍基地建設を契機に戦後広がったコンクリ建材を「新しいよいものを墓に用いる」という理由で墓に用いていた。沖縄では台風や強烈な日差しにより墓が劣化するため、その都度改修を繰り返す必要がある。後の改修の際には花崗岩を使用していることから、その時々「よいもの」を墓に用いている過程が明らかになる。このように変化し続ける墓には、絶え間ないケアを必要とする。また皆が墓に集まりやすくするなど、墓の祭祀から墓を基点としたO村出身者の記念の祭祀へとその姿が変化していた。このように墓を中心とした人のネットワークが形成され、かつ変化している。以上のような墓と人との相互交渉から、一方的にではなく、お互いを取り込み、媒介していく過程を繰り返すという墓のエージェンシーが浮かび上がる。

以上の考察を通じて、墓制研究において顧みられることがなかった、現代沖縄に生きる人々の記憶、情緒、実践といった「生活のリアリティ」が明らかになるだろう。とりわけ、祖先とのエージェンツたる墓に着目することは、現代沖縄における死生観を読み解く手がかりになる。一方で、現代日本の墓をめぐる問題関心は、「家族」の変容を背景とした墓の継承システムを問題視し、現行の墓のオルタナティブを求める方向に収斂している。この点に関して、「モノ」と人との関わりをみることで、墓という「モノ」を通じた死生観という異なる視点を提供することが可能となる。(2034字)

[参考文献]

足立明

2009「人とモノのネットワーク」田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会。

越智郁乃

2008「墓と故郷—現代沖縄における『墓の移動』を通じて—」『アジア社会文化研究』第9号。

2009a『『墓の移動』を通じた『沖縄』研究の再考』『アジア社会文化研究』第10号。

床呂郁哉・河合香史

2011「なぜ『もの』の人類学なのか？」床呂郁哉・河合香史編『もの人類学』京都大学学術出版会。

名嘉間宜勝

1979『沖縄・奄美の葬送墓制』明玄書房。

渡邊欣雄

1994『風水 気の景観地理学』人文書院。